

浄土真宗本弘寺婦人会だより

平成18年3月 第21号

春が訪れ 梅の花がほころんだ 不思議でたまらない

ことのほか寒さ厳しい冬でしたが、今年も春の訪れが感じられます。そんな中、境内の紅梅が遅ればせながら、一輪、二輪かわいらしくほころび始めました。この事は決して当たり前ではありません。春が訪れるのも、梅の花がほころぶのも、私は不思議でなりません。梅の花がほころぶことができたのは、車の排気ガスにも負けず、害虫にも負けず、厳しい寒さにも耐えられたからであります。そして忘れてはならないことは、天地自然の不思議な大きな恵みを賜ることができたからであります。しかし、その恵みも良い条件ばかりではありません。夏の酷暑も冬の厳寒もありますが、それも天地自然の有難い恵みと素直に全てを受け入れられたからであります。自然界から学ぶことは多いですね。

私の生命は不可称、不可説、不可思議なご縁の中に、大きな願いをかけられていただいた命であります。そして、その命は私の命ではありません。お預かりした尊い命であります。お預かりした命ですから、返せよの催促が来れば今晚にもお返ししなければならない命であります。返せよの催促がいつ来るかは誰にも分かりません。分からないから、今が大切になり、どう生きるかが大切な問題になるのでありましょう。

生まれたことと死ぬことは、全ての人に共通したことでありますが、異なることは生と死の間、すなわち今です。今をどう生きるかが異なる点であります。人は不治の病にでも陥ると、なぜ私がこんな病に苦しまなければならないのだと、元気な人が憎らしく思えたり、経済的に苦しむと、社会が悪い、政治が悪いと他を恨み、何かと自分の都合の悪いことが起きると、すぐ不平、不満、愚痴をこぼし、自暴自棄に陥り、ますます苦しみ、惨めな思いになるのであります。

阿弥陀如来はそうした衆生を哀れみたまいて、見捨てはしない、必ず救うとお誓い下され、今も働き続けてくださっておるのです。仏の慈悲の聲に耳を傾けようではありませんか。仏法を聴聞させていただきますと、人生には様々な避けることのできない苦しみがありますが、逃れることができない苦しみから逃げよう、避けようとするから、いよいよ苦しむのですよ。そのまま、そのまま怖がらず、しっかり受け入れなさいと優しく囁く仏の聲が聞こえてきます。何か安らかな心になれる思いであります。仏の声を聞かせていただくと、夫婦となり、親子となり、兄弟、友達、師弟となるには、深い不思議な大きなご縁があったのでしたと知らされ、人を思いやる心が温かく湧いてくるようです。与えられた仕事も、ただ金儲けのためだけでなく、世の中の要求に応えたい。他人様の役に立ちたい。という心が、深まる思いであります。何事にも背伸びすることなく、卑下することもない、今のままで、そのまま良かったのだ。そんな私をいつも仏様は温かく見守って下さっていると力強い安心を味わうことができる思いであります。そこに苦しみが無くなるわけではありませんが、苦しみを抱きながらも、充実した納得のいく人生が開かれるのであります。 住職 高島利明

今後のお知らせと予定

日付	本弘寺	婦人会
4月8日	花まつり 午後1時 邦楽演奏会	花まつり 午後1時
6月20日	永代経法要 午後1時	総会 午前11時より
8月13～16日	お盆法要 16日午後1時	お盆参拝者へのお茶接待

読者の広場

「第三回全国婦人会大会に参加して」

小林絢子

昨年11月28日、御正忌報恩講に合わせて、東本願寺派婦人会第三回全国大会が開催されました。私たちは朝7時半に本弘寺を出発しましたが、途中渋滞もあり、冷や冷やさせられながらも、なんとか御満座法要に間に合うことができました。本堂には全国より集まった500名を超える会員、檀信徒の人でいっぱいでした。御満座では板東曲という体を前後左右に揺すって行うお勤めをはじめて見ることができ、大変感動しました。

昼食のあと、全国大会が始まり、北海道から九州まで全国の支部旗が仏前に献げられ、旗揃えが行われ、本弘寺支部28名参加の代表で私が旗手のお役をお受けすることになりました。初めての参加で、支部旗を持ってその重さに少しビックリしました。本山旗を中央に28の支部旗が揃うと会場全体が引き締まった空気につつまれたように思いました。大会の中で、一番心に残ったことは、なんと言っても我が本弘寺支部の高島会長の理事長挨拶です。本当に堂々と立派で胸が熱くなりました。総裁様よりお言葉をいただき、記念の短冊もいただいて大会は終了しました。相模原に戻り、御住職を交えての「せんざん」での会食で、みんな感想を述べ合い、楽しく大会に参加できたことを喜び合いました。意義のある1日に感謝いたします。



本部を代表して挨拶をする高島美智枝理事長
(神奈川県本弘寺支部)

「命」

穴吹トヨ

私の娘の嫁ぎ先の父親は長く大学教授をしておりましたが、その傍らでブルガリアに桜の木を贈る活動をしていました。何年か前にその桜の木が大きく育ったので、是非一度見に来てほしいとの市長よりのお誘いがあり、行ってきました。大変な歓迎を受けてお花見をしてきたと嬉しそうに話しているのを聞きました。

その後、自分でツアーを組み、知り合いの方々と出かけていったようでしたが、2年ほど前に帰らぬ人となってしまいました。でも、桜の木はそれから幹を太らせ、枝を伸ばして立派な桜並木となってブルガリアの人々を楽しませてくれることでしょう。

故人の意志が桜の木の命に引き継がれていくと、この季節になるとそんなことを思います。

